

きらめき人

集う、起業家たち

奇跡の復活、たくさんの方々の縁で生かされている

まつの みえこ  
松野 三枝子さん



「農家に嫁いだ頃から『いつかは農家レストランやりたい!』と思っていた。闘病で諦めかけた夢が、まさか震災がきっかけになるとは」と、噛みしめるように振り返る。

MIEKO MATSUNO

**末** 期のスキルス性胃がんで余命わずか!と宣告されたのが12年前。仙台の病院で手術をした3年半後、公立志津川病院に入院、治療を始めた。

そして、あの日。午後の入浴中に巨大地震に遭うも、偶然看護師に助け出され上の階へと走った。そこでの光景は、何とも悲惨で言い尽くせない。「私があの子の代わりに死んでもいい!」泣き叫ぶ三枝子さんに、婦長さんが一喝した。「バカなこと言わないで、あなたは生かされたのよ」そのことが後の人生の糧になっていると話す。

人は食べないと絶対にダメという思いにかられ、翌日から被災者に対して夢中で炊き出しを始めた。そんな毎日を通す三枝子さんに奇跡が起きる。再入院した病院でがんの消失が確認されたのだ。

震災から3年後の1月、中学校時代の同級生をはじめ、たくさんの方々からの応援・支援が実を結び、念願の農漁家レストラン『松野や』が完成した。店で話を聞いたお客さんから、私たちの町に来ていただきたいと講演依頼が殺到し、定休日やイベント出店の合間を縫って全国各地で語り部活動も行っている。

実体験を語る講話では「まずは自分の命を守る事を考えてほしい。普段から家族で避難先を決めておく必要があります」と付け加えているそうだ。奇跡的に命を救われた三枝子さんの言葉は重い。

町

内でワイン用のブドウを栽培生産し、同じく町内にワイナリー(醸造)を建て、南三陸産ワインの製造に取り組む「南三陸ワインプロジェクト」。今年1月から新たに地域おこし協力隊として町に移住し活動に参加したが、山形県出身の佐々木道彦さん。

世界三大漁場とも称される志津川湾の豊富な海の幸とマッチする高品質で本格的なワインの製造を行い、町の食や自然に興味のある観光客層を新たに町に呼び込むことを狙っており、2021年秋からのワイナリー稼働を目指し奔走中だ。「良いワインを醸造するには、いかに良いブドウを作れるかの勝負」と話す道彦さん。2016年から徐々に本数を増やしてきたワイン用ブドウの苗木たち約800本は、入谷地区の里ですくすくと育っている。

需要の高まりによって苗木が手に入りにくかったり、観光にも活用できるほどまとまった広い農地がなかなか見つからなかったりと、さまざまな困難に直面しながら、着任からわずか2カ月にも関わらず、栽培、醸造、事務と大忙しの道彦さん。趣味のトライアスロンなどで培った持ち前の体力でまい進している。

「今年には町産のシャルドネブドウが念願の初収穫の予定。全力でブドウの栽培に取り組み、初の南三陸産ブドウを使ったワインを作りますのでご期待ください!」

MICHIHIKO SASAKI



トライアスロン、トレイルランニングなどが趣味だという道彦さん。

ささき みちひこ  
佐々木 道彦さん

“海に見えるワイナリー”で町の活性化を